関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

図書紹介　卒業生たちの三つの業績

著者	田中 欣和
雑誌名	教育科学セミナリー
巻	45
ページ	45-46
発行年	2014-03-31
その他のタイトル	Book Introduction　The Books of Three Graduates from the Department of Education
URL	http://hdl.handle.net/10112/8301

図書紹介

卒業生たちの三つの業績

田　中　欣　和

関大はおもしろい大学だったと思う。多元主義と率直な発言をよしとする庶民的な「自由闊達（じゆうかったつ）」の気風の中で多様な人材が育つ。教育学科は特にそうだった。ここ一年ほどの間にこういうものを作りましたと私に届けてくれた卒業生が３人いる。それぞれにユニークだ。こういう卒業生もいるということを在学生に伝えることは意味あることだと思う。紙数の関係で②③はごく簡単な紹介になった。

①門林良和編『15歳のバトン』（ボーダーインク、2013）

門林氏は現在、高校野球で有名な沖縄の興南高校・中学校の先生。沖縄へのゼミ旅行を契機に卒論も沖縄問題。同ゼミ同学年の愛妻と共に沖縄へ移ったのは６年前だが、以後の活躍はめざましい。2010年観光・まちづくり教育賞、2011年読売教育賞、2012年グローバル教育賞と連発だったが、別に賞のために賞を追っている訳ではない。生徒たちとの合作成果であるもので、賞を取ることで生徒たちに自信を与えたいとの思いがあるようだ。学生時代の経験を土台に沖縄で煮つめられた求める教師像は「正解を教える教師」にとどまらず「教師と社会の津梁（かけはし）」になることだった。普天間基地移転でゆれる中で「先生、これから沖縄の未来はどうなるの？」という中学生に「一つの正解」を選んで与えることはできない。ここは生徒たちと共に学ぼう。生徒たちを直接社会につなごうとしたことから、インタヴューの企画が決まった。まず取材のプロたる新聞記者を招き、生徒の前で門林先生へのインタヴューをやってすぐ記事を書いてもらう。同時に生徒たちにも記事原稿を書かせ、プロの仕事と比べてみる。これでポイントを学ぶ。インタヴューも写真も生徒の仕事。県の助成金を受けられたのも生徒のみだった。

２年間で42人のインタヴューを中・高生が行って、その成果の半分を本にしたのだが、登場する顔ぶれがすごい。元NHK・現東工大の池上彰、沖縄県元知事の大田昌秀、現知事の仲井真弘多、ノーベル化学賞を受けた鈴木章、巨人軍監督原辰徳等。杉並区立和田中学校元校長として有名な藤原和博は、興南学園理事長・校長・野球部監督の我喜屋優の特別対談インタヴューを受けてくれた。こういう超有名人ばかりではない。沖縄戦遺骨収集のボランティアグループ代表。モンゴルのマンホールチルドレン（冬は酷寒の地でマンホールは温水パイプが通っているので住みついた）を引き取った、孤児院とその卒業生を支援するNGOユイマール代表といった市民活動家、他に沖縄ツーリストなどの企業経営者も漫画家も…。大人の企画では「とても無理」と思うところだが、こちらの日程の都合で実施できなかった場合を除けば全員が多忙な日程を調整し、ボランティアで受けてくれた。断った人はゼロ。生徒たちの企画だからこそ受けてくれたようだ。たずねた内容は、「どのような学生時代をすごし、なぜ今の道を選び、これから何をしていきたいのか」「沖縄の若者へのメッセージ」といったことで示されたのは、「一つの正解なき」問題と向きあって

きた大人たちの「生き方」そのものだった。つまり、沖縄の次代をになう若者への人生の先輩たちの贈りものとしてのメッセージ集が「夢のバトン」であった。

②名月かな他『統合失調症とわたしとクスリ』（ぶどう社、2005）

名月かな（筆名）氏は、他学科を卒業して1993年に教育の大学院へ来た。学部時代から「生きにくさ」を感じ、自殺未遂もあったが、精神科へ行くと自由が奪われるという感じで行かなかった。大学院入学で、居場所ができたところで一安心して精神科へ行けた。統合失調症と診断され、休学や留年をくりかえし、長い年数をかけて博士課程単位取得退学となった。この本は同病の４人の共著だが、内容は目次で大体示せそうである。

プロローグ　クスリをのむ体験を語りあって見ませんか

序章　精神障害者は、どう生きようとしているか（用語説明含む）

２章　発病から　新薬に出会うまで

３章　薬の勉強をしながら、ネットで相談に答える

４章　医者とのコミュニケーションと信頼関係

５章　わたしは、クスリをどんなふうにつかっているか

６章　わたしは、クスリや医者とどうつきあっているか

エピローグ　かしこい病者になりましょう！

名月氏はプロローグ、５章、６章、エピローグを書いているから実質編著者かと思える。４人の筆者はすなおな表現力があって読みやすい。この本は初版の出た翌年に２刷が出ているから、こういう本へのニーズがあることはたしかである。

③公益社団法人東京電気管理技術者協会『平成24年度　技術研究発表会資料』

231頁に及ぶこの資料は「保安管理者のための太陽光発電設備と系統連係」というテーマでこの協会の技術安全委員会のメンバーが、１年以上かけて太陽光発電設備の保安管理の本来のあり方を模索する共同作業をしてきた成果であるが、これをまとめた技術安全委員長の鈎（まがり）裕之氏が何と教育学科の90年卒なのである。業界仲間でも不思議がられる学歴になっているらしい。委員会メンバーの多くは勿論工学部卒である。その鈎氏は「はじめに」のはじめに「現場が混乱している」と記す。太陽光発電は急速な普及が進められているのに、保守管理技術の精査が進んでいない。事故を未然に防ぎ、出力の異常低下を防ぐために、技術的根拠や知見をできるだけたくさん集め、精査してまとめたのが本資料だということである。

鈎氏は沖縄へのゼミ旅行レポートで「沖縄では海が海している。空が空している。そして人間が人間している」といった文を記したことが私には強い印象になっているような、典型的な文学部生だと私は思っていた。「でも、今の仕事でも基本的な考え方はゼミで学んだことですよ」という。（？）という表情をしたのだろう。「結局、一つの正解が与えられていないところから出発して、調べ、考えるということですね」と、前出の門林氏と似たようなことをいった。